

リ
セ
ツ
ト
10

◀ 風姫



▲ クヌート

フレイルの父親。
レングランドの魔物研究所に
勤めている。

▲ 焔王
ディグルレーメ



▲ 水姫

ルーナの守護者たち



シリウス▲

◀レグルス

▲ リュシオン(22歳)

クレセニアの王太子。
強大な魔力を持つ魔法使い。
現在、魔法が使えない状態
になっている。

▲ カイン(20歳)

ルーナに助けられ、
公爵家に身を寄せていた、
エアデルト国の第二王子。
現在はクレセニアに
留学中。

フレイル(19歳)▲

魔法師団に所属してい
る、精霊使いの少年。
他人にはその力を秘密
にしている。

▲ ルーナ(14歳)

千幸が転生した姿。
リヒトルーチェ公爵令嬢。
前世の記憶と強大な魔力を
持ちつつ人生やり直し中。

千幸(享年18歳)▲
超不幸体質の女子高生。



第一章 禁じられた魔法

あなたは、自分の誇りをかけ、抗うことができますか？

けぶるような霧雨が降る、クレセニア王国——王都ライダー。

ゴーンと重々しい鐘の音が鳴ると、数秒置いてあちこちから続々と鐘の音が重なって響いた。その響きが物悲しく感じられるのは、それが天逝した王妃を送るための音色だからだろうか。

王都では現在、国王バートランドの妃——キーラ王妃の国葬がしめやかに行われていた。

流行り病により療養中と伝えられていた王妃。しかし、治療の甲斐もなく冥府へと旅立ったのだ。だが、これは表向きの発表であり、真実ではない。

彼女は、操られた女官によって毒を盛られ、殺されたのだ。

王都の民は、若くして亡くなった王妃の死を、ただ悼んでいた。

そのため、今日ばかりはどの商店も軒並み店を閉め、王都は静まりかえっている。

街並みのあちこちに半旗が掲げられた風景は、人通りの少なさも相まって一層寂しく映る。

そんな中、数十回と続いていた鐘の合唱が、最後の余韻を残して消えた。

鐘の音の終わりが意味するのは、大神殿の聖堂で行われていた王妃の葬儀が滞りなく終わったということ。

この儀式は収容人数の問題もあり、王族や他国の賓客を含めて参加しているのは上位に位置する貴族のみだ。それ以外の者については、儀式終了後に祈りを捧げられるようになっていた。そうして儀式を終えた参列者たちは、肅々と大神殿から立ち去って行くのだった。

ライダーでもっとも広大な敷地を有する、王宮。いくつかの建物から成るそこは、王族の居住地であり、政の中心でもある場所だ。

その宮の一つが、王太子であるリュシオンが暮らす王子宮である。

今は亡きキーラ王妃や、その娘であるネイディア王女が暮らす奥宮に比べ、いささか地味に思えるのは、色彩の少なさゆえだろう。

王子宮の廊下などに飾られる装飾品の類いは、極力色味を抑えたシンプルなものばかりなのだ。

とはいえ、簡素でありながらそれらが目を引くのは、一流の職人たちの作品であるからこそだった。

そんな王子宮の一室。この宮の主人である王太子リュシオンの部屋に、二人の人物がいた。

ひとりは腰まである艶やかな銀髪と、緑の瞳を持つ美少女——リヒトルーチェ公爵の次女であるルーナ。

そしてもう一人は、柔らかく波打つ金茶色の髪と、珍しい青緑色の瞳をした青年——隣国エアデ

ルトの第二王子カインだ。

「そろそろ、戻る頃かな……」

窓際に立ち、しとしとと降る雨を見つめていたルーナが、ぼつりとつぶやいた。

「そうですね。終わりの鐘からだいぶ経っていますし」

カインはルーナの隣に並ぶと、同じように窓の外を眺めながら答える。

「ですが、仮にも母君の葬儀ですからね。簡単には戻ってこれないのかもしれないかもしれません」

「そうだね……」

ルーナはうなずくと、会話でほめかされた人物——王太子リュシオンに思いを馳せた。

国王の妻である王妃キーラ。

だが、リュシオンにとっては実母ではない。本当の母親である前王妃は、彼が幼い頃に夭逝しているのだ。

生さぬ仲である今の王妃は、リュシオンに良い感情を持っておらず、良好な関係ではなかった。

しかし、義理とはいえ、母は母だ。

聖堂での式が終わり、リュシオンが王宮に帰ってきたのちも、国賓などへの対応は続いている。

そのため、すんなりと身体を空けるのは難しいと思われた。

「無理しないといいけど……」

ルーナは、ここ数日の彼の疲れた顔を思い出し、心配そうにつぶやく。

普段から多忙なリュシオンだが、王妃の国葬の前に、いつも以上の多忙を極めていたのだ。

「とりあえず、これで一段落つくわけですし、休養も取れるでしょう」

「うん。そうだよね」

カインの言葉に少しだけ安堵し、ルーナは緩く口角を上げる。そして、憂鬱な気分を振り払うように話題を変えた。

「でも、リユーがいないのに、わたしたちが部屋で待っているって変な感じよね」

「確かに。来客用のサロンなどではなく、完全に彼の私室ですし。正直落ち着きませぬね」

「だよね！」

ルーナは大きくうなずくと、頭を動かして部屋を見回す。

部屋には、くすんだ金で細かな模様が描かれた白色の壁紙が使われていた。一方、家具類は濃い色合いの重厚なもので揃えられている。

窓際には丸いテーブルと四脚の椅子があり、その上には、ルーナとカイン用の二客のティーカップが置かれていた。

さらに、壁際の一角を囲むように大きな本棚が配置されており、書き物机と共に、小さな書斎といった趣を醸し出している。

今まで幾度か入室したことがあるとはいえ、部屋の主がいない時に私的スペースに待機している状態。落ち着かない気分になるのも仕方がなかった。

ルーナはふうつと一度息を吐き出すと、窓に背を向け、ティーカップのあるテーブルへと向かう。そして、カインがルーナのために引いた椅子に、軽く礼を述べて座った。

「ねえ、カインはどう思う？」

唐突に尋ねるルーナに、カインは少しだけ逡巡した後、口を開いた。

「リュシオンの魔力のことですか？」

訊き返すカインに、ルーナはコクンとうなずく。

「正直、リュシオンの様子を見ても生命の危機があるなんて思えないですね……」

「そうだよね、体調が悪くなった様子もないし」

「ええ。ただ、彼がそれを隠しているというのならわかりませんが……」

カインの言葉に、ルーナは心配そうに眉を寄せる。

ここ数日は、王妃の国葬のため、ますます忙しそうに動いていたリュシオンだ。疲れは見えても、あからさまな体調不良というのは窺えない。

「隠してる……か。リユーならありえるかも」

「そうですね」

リュシオンはクレセニアという大国の王太子だ。その立場から、弱みを見せるような真似は決してしない。だが周囲にはわからないだけで、無理をしている可能性は十分にあった。

「いったいどうすればいいんだろう……」

ルーナは無意識につぶやくと、リュシオンに驚きの事実を告げられた時のことを思い返した。

「俺の生命を救う手伝いをしてほしい——」

リュシオンの口から飛び出した言葉に、ルーナは返す言葉が見つからず、ただ沈黙した。

(生命？ 救う？ それって……)

頭の中でぐるぐるとリュシオンの言葉が回る中、ルーナは自分を落ち着かせるため、大きく深呼吸をした。

「リユー、それってどういう意味なの？」

「意味か？ 意味というか、事実だな」

彼女の問いに、リュシオンは雑談をしている調子で答えた。

「事実って……ちゃんと説明してよ！」

あまりにも他人事のように話すリュシオンに、ルーナは我慢できずに叫ぶ。

彼女に睨みつけられているにもかかわらず、リュシオンはフツと口元を緩めた。

「俺とジーンが、ベルフーア公爵に襲われたことは聞いたか？」

リュシオンの問いかけに、ルーナはうなずいて答える。

「それは問題なく返り討ちにしたんだが、その際忘れたいことにベルフーア公爵に罠に嵌められた」

「罠？」

「ああ。俺の魔力を封じるといふものだ」

「魔力を？ リュシオンの？」

驚きのあまり、片言のようになりながらルーナが問う。そんな彼女に、リュシオンは首肯を返した。

「魔力を封じると、魔力がなくなっただってことなの？」

「まとまらない思考のまま、ルーナは尋ねる。

「いや、魔力自体がどうこうではないな」

「どういうこと？ それと生命を救うってどうつながるの？」

ルーナは身を乗り出すようにして、リュシオンを問い詰める。

生命の危機だというのに、自分よりよほど落ち着いているリュシオン。そんな彼に、ルーナは苛立ちを隠せなかった。

「ちゃんと説明するから、落ち着け」

「落ち着いてるよ！」

すかさず叫ぶルーナに、リュシオンは苦笑しながら口を開く。

「悪い。からかうべき時じゃないよな」

そう言っただけで真面目な顔になったリュシオンを見て、ルーナも表情を引き締めた。

「さっきの質問だが……生命の危機だというのは本当だ」

「魔力を封じられたから？」

「ああ」

リュシオンがうなずくと、ルーナは冷静になった頭で考える。

（魔力封じ……たとえば魔法がかけられた護符や魔法道具に、〈無効〉や〈消去〉の魔法をかけることで発動を止めることはできる。魔法の干渉を無効にする〈結界〉なんかもあるよね。でもそれはあくまで魔法に干渉しているだけ。その源である魔力そのものを封じてしまうなんて、本当にできるの？）

難しい顔で考え込むルーナ。

その内容が予想できたのか、リュシオンが口を挟む。

「これは所謂外法。禁呪と呼ばれる類いのものらしい」

「禁呪……」

「そうだ。術者の生命を糧に発動するような魔法で、生命が使われなかったとしても、それに近い代償が必要となる。それゆえに禁じられ、忘れ去られたおぞましい魔法なんだ」

「そんなものがリューにかけられたっていうの!？」

ルーナが思わず叫ぶと、リュシオンはおもむろに左腕の袖を捲り上げた。

「——ッ！」

目の前の光景に、ルーナは息を呑む。

捲り上げられたリュシオンの袖口。そこから覗くのは、巻きつく蛇、あるいは不気味に伸びた蔓とも思える痣だった。

リュシオンの手首から二の腕に向かって伸びるそれは、袖口のさらに奥へと続いている。

「リュー、それは……」

ルーナが絞り出すように声を発すると、リュシオンは袖口を直しながら告げた。

「今はこの辺りまでだが、だんだんと伸びているのは確かだ」

「その痣、禁呪と関係あるの?」

身体を震わせつつも、ルーナは尋ねる。

そんな彼女に、リュシオンは淡々と返した。

「おそらくな。調べてみたが、禁呪を解かない限り、この痣は身体中に広がっていくようだ」

「そんな……!」

（広がっていく痣だなんて、まるで生きてみたいじゃない！ それも、リューを侵食して育つ不気味なモノが……こんなのが自分の身体に現れるなんて、わたしだったら耐えられないよ）

ルーナが絶句する中、リュシオンは静かに告げた。

「これは、身体からの警告と言えるかもしれないな」

「警告?」

「ああ。ルーナ、魔力暴走を起こすのが子供ばかりなのは何故かわかるか？ それも、魔力保有量が多い者なのは何故だ?」

リュシオンの言葉に、ルーナはしばし考え込む。

「まだ魔力の扱いがうまくないから……?」

「半分当たりだ。幼い子供は精神的にも未熟で、当然ながら魔法の扱いを知らない。発散できない魔力が内で渦巻いているのを察した身体は、爆発しないよう魔力を外に放出する。そして、魔法という道しるべのない力が暴走するというわけだ」

「じゃあ、その魔力を放出できないように封じられてしまったら——」

「体内で魔力暴走が起こる。この痣はおそらく、それまでの猶予を教えてくれるもの。これが全身に広がった時、俺は死ぬ」

「そんな！」

リュシオンの言葉通りならば、あのおぞましい痣は生命のカウントダウンを示すものだ。それが手首から二の腕まで広がっているのだから、すでに幾日か過ぎてしまったということだった。

「リュー、どうすればいいの？ わたしに何ができるの？」

「さすがのようにルーナが問いかける。」

（何か……なんでもいい！ リューを助けるために、わたしにも何かできるなら！）

そんな彼女の心の声が聞こえたのか、リュシオンは優しい眼差しを向けた。

「だから言っただろう？ 俺を助けてほしいと」

「そんなのわかってる！ わたしが言ってるのは、どうすれば救えるかってことだよ!! リュー自身のことなのに、どうしてそんなに飄々としているの？」

堪え切れず、ルーナが怒りの形相で叫ぶと、リュシオンは困ったように彼女を手で制した。

「ふざけてるつもりはないんだがな。そして諦めてるわけでもない。おまえが出かけている間、俺

の方もなんとか呪いを解く方法はないかと探してはいたんだ」

「それで、解決法は見つかったの？」

「一応は」

「一応は……？」

首を傾げるルーナに対し、リュシオンは一息ついてから口を開く。

「単純なことだ。術をかけた者に解呪させるか……その者を殺すかだ」

魔法は永久にかけ続けることなどできない。

もちろん、魔道具や護符などのように、媒体にかけることによって半永久的に持続させることはできる。

だがその場合でも、媒体が壊れば魔法は終わってしまう。

禁呪と呼ばれていようとも、魔法であることに変わりない。ならば、術者あるいは媒体となっているものを破壊すれば魔法は消えるはずだ。

「ルーナ。国葬まで俺は動くことができない。その間、俺の代わりにこの一件について調べてくれないか？」

「もちろん、やるよ」

ルーナは、リュシオンの目をしっかりと見つめて言い切る。

本来であれば、魔法こそそれなりに使えるものの、まだ未熟な彼女が動くべき案件ではない。

だが現在は王妃の国葬を控えているため、公人の立場にあるリュシオンだけでなく、他の仲間た

ち——ジーンやユアン、フレイルも満足に動くことができなかった。

他に動ける人間がいるとすればカインだが、他国人であるためにクレセニア国内では行動しづらい。

リュシオンが全幅の信頼を置ける者の中で今動けるのは、ルーナだけなのだ。

（わたし一人で解決できる問題じゃないのはわかってる。でも、できることがあるならやるしかない！）

「まず、何をしたらいい？」

ルーナは、じつとリュシオンの目を見つめて訊いた。

「俺の魔力を封印した禁呪について、でき得る限りの情報が欲しい。そのためにはまず、レングランドと王宮の図書室にある書物を調べてくれないか」

「わかった。でも、禁呪なんてものが載っている書物って、普通に閲覧できるの？」

ルーナは心配そうにつぶやく。

レングランド学院の図書館は、学生や研究所の職員であれば利用できるため、学院に通うルーナが利用するのは簡単だ。

そして王宮の図書室も、手続きを踏めば官吏以外の者でも立ち入りが許可される。

しかし問題は、レングランドと王宮の図書館共に、閲覧を制限している禁書の類が存在することだ。

今回リュシオンが調べてほしいと言っている書物は、その禁書である確率が極めて高い。

「その点は、俺の方で手配しよう。王宮図書室への〈転移門〉の使用と、禁書がある特別室への入室を許可する。他の人間には悟られないよう、司書のいない日に目的のものを探してほしい。王宮の図書室は、開放される曜日、時間が決まっている。当然司書がいるのもその時間帯だから、そこを外せば問題ないはずだ」

「わかった。でも、レングランド学院の図書館については？ あそこは研究所の人も使用するし、休館日なんてないよ？」

「そっちの方は、学院長の力を借りることにしている」

「学院長の……」

ルーナはリュシオンの言葉で、レングランド学院の学院長であるロドリゴ・マティスを思い出す。

熊のようないかつい体格と顔立ちの男性は、一見すれば戦士だが、実は世界でも五指に入るほどの白魔法使いだ。

本来ならば、彼とルーナの関係は学院長と学生という接点だけのはずである。けれど、ロドリゴが父の知己であること、また入学する前に、隣国エアデルトへの旅に同行したことから、ルーナにとっては親交の深い人物だった。

（そういえば、学院に入学した後は疎遠にしていたかも……）

ルーナはそんなことを思いつつも、一生徒と学院長の立場からそれも仕方ないと納得する。

そんな彼女を余所に、リュシオンは話を続ける。

「これはあまり知られていないが、学院長の部屋からは学院内すべての部屋へ繋がる〈転移門〉が設けられているんだ。それを使わせてもらえば、禁書がある特別室へ直接飛べる」

「確かに。それなら悪目立ちすることもないね」

「ああ。学院長への話がつき次第、おまえに連絡する」

「そしたら、わたしは学院に行つてロドリーゴさんに会えばいいのね？」

「そういうことだ」

リュシオンの言葉に、ルーナは力強くうなずいた。

「皮肉だけど、学院が休校で助かったね」

ふとつぶやいたルーナに、リュシオンは苦笑いをして同意する。

王妃の死という大きな出来事により、レングランド学院はしばらく休校になっていた。ただ、同じ敷地にある研究所は、国葬の日を除いていつも通り機能している。

そのため学院内に学生の姿はなく、ルーナが学院長室を訪れても、研究員以外に見られることはない。

さらに、学生としてではなく、公爵家の令嬢としての訪問であれば、余計な詮索をされることもないはずだ。

「王宮の図書室についても、司書の予定を確認して連絡する」

「うん。学院の方は国葬が終わつてもしばらく休校だし、連絡をもらったらすぐに調べるよ。それまでは何か手がかりがないか、風姫さんたちや、しいちゃんたちにも相談してみる」

「ああ、頼む」

「任せておいて。……でもリュウ、本当に身体は大丈夫なの？ 具合が悪くなつたりしていない？」

ルーナが聞くと、リュシオンは問題ないとばかりに微笑む。

「特に体調が悪くなつたりはしていないから大丈夫だ。もつとも、王妃の葬儀を控えている今、多忙で疲れているというはあるけどな」

「のんびりする時間がないのはわかるけど……リュウ、お願いだから無理だけはしないでね？」

「わかった、わかった。無理はしないさ」

心配そうなルーナに対し、リュシオンはおどけたように答えた。

ルーナは不安を感じつつ、それでも彼を信じて笑みを返す。

そんな彼女に、リュシオンはフツと笑つておもむろに右手を伸ばした。彼の手が辿り着いたのは、ルーナの頭の上。

「リュウ……」

困った表情で見上げるルーナに、リュシオンはもう一度口元を緩ませる。

「俺は大丈夫だ。だから、頼んだぞ」

「うん」

ルーナは心の中にある不安を無理矢理振り払うと、力強くうなずいてみせた。

その日の夜。

自室にいたルーナの耳に、リーンという涼やかな音が届いた。

慌てて首元にある魔道具マジックツルのペンダントに手を触れれば、すぐさまよく知る声が聞こえてくる。

「ルーナ、聞こえるか？」

「リユー」

答えの代わりに名前を呼べば、リュシオンはすぐに用件に入った。

「今日の件だが、学院長から了承の返事がきた。明日ならば訪ねていつでも大丈夫だそうさ。おまえの都合はどうなんだ？」

「もちろん大丈夫だよ」

「そうか。なら、明日は学院へ向かってくれ。王宮の図書室の方は、ちょうど三日後に司書の休みが入っているらしい。だから学院を調べた後でいいだろう」

「わかった。じゃあ明日、図書室に行ってみるね」

「ああ、頼む」

そう言うと、リュシオンは忙しいのか慌ただしく魔道具の通話を切った。

ルーナはふうつと息を吐くと、通話が切れたにもかかわらず握りしめたままだったペンダントからそつと指を外す。

（明日、何か見つけられるといいんだけど……）

不安と期待に心が揺れながらも、ルーナは眠りについた。

十

翌日の午前中。ルーナは早速レングランド学院を訪れていた。

彼女がまず向かったのは、学院長であるロドリーゴのもとだ。

「お久しぶりです、ロドリーゴさん」

学院長室に入ったルーナは、出迎えてくれたロドリーゴに挨拶する。そんな彼女に目を細め、ロドリーゴは座るようにとソファを手で示した。

ソファに向かい合って座ると、改めてロドリーゴが口を開く。

「こうして話すのも、確かに久しぶりだね。学院で姿を見ることは何度もあるが、他の生徒がいる前で気軽に声はかけられないからなあ」

「そうですね」

久々の気さくな会話に、ルーナは笑顔でうなずく。

「だが、君の優秀さはいろいろいるところで聞いているよ。ご両親もさぞかしご自慢だろうね」

「だといいんですが……」

「間違いないさ。なんといつても、ここにその自慢を聞かされた人間がいるんだから」

ロドリーゴは、そう言うと悪戯いたずらっぽく片目を閉じた。それを見て、ルーナは顔を赤くする。

（もう、父様ったら何してるのよ！）

憤りつつも、思わぬところで知った肉親の愛情にルーナの表情は柔らかい。高崎千幸だった前世、物心ついた時にはすでに、彼女には父親という存在がいなかった。だからこそ、熱望していた家族に愛されていることが嬉しく、そして奇跡のように感じるのだ。

「父様がすみません……」

恥ずかしそうに頬を押さえるルーナを見て、ロドリーゴは微笑ましくなる。
(確かに、こんな可愛い娘がいれば親馬鹿にもなるか……)

ロドリーゴの心境など知らぬルーナは、照れ隠しから話題を変えた。

「あの、今日入らせてもらう部屋って、貴重な本がたくさんあるんですよね？ 注意することがあれば教えてもらえますか？」

「ああ、そうだね」

ルーナの質問に、ロドリーゴは顎に手を置いて何度もうなづく。

本来ならば、司書の立ち合いのもとでしか閲覧が許されない場所なのだ。今回は非常事態とはいえ、問題が起これば大変なことになる。

そのような事態にならないためにも、ルーナにとつては必要な質問だった。

「特に貴重なものは鍵をかけた棚にしまつてあるので、そこに触らないようにしてもらえば大丈夫だ。ああ、しまつてあるものは今回の件とは関係ないものだからね。あとは、赤い紐の帯で括つてあるものも触らないように。こっちは有害な魔法がかかつている類いのものだから、むやみに触ると危険だ」

「鍵のある棚と、赤い帯紐の本ですね」

「そうだ。帯はこれくらいのお太さのもので目立つから、すぐわかると思うよ」

ロドリーゴは、そう言つて二、三センチほどの幅を指で作つた。

ルーナはその言葉を受けて頭の中で考えつつ、確認するように尋ねる。

「ええと、触るのはだめなんですよね？ 重なっているのをどける場合は……」

「ああ。大丈夫、大丈夫。持ち上げたりする程度なら問題ないさ。帯が重要でね、それを取らない限り危険はない」

「なるほど」

(つまり、帯が封印の役割をしているってことなのかな?)

なんとなく当たりをつけ、ルーナは納得する。

「これは一部で有名な話なんだがね。昔、好奇心旺盛な研究員が、司書が目を離れた際に勝手に帯を外してしまつたんだ」

「えっ、大丈夫だったんですか？」

「いや、大丈夫じゃなかったな」

驚いて聞き返すルーナに、ロドリーゴは真顔で答える。息を呑んだ彼女に、ロドリーゴは続けた。「その本というのが、開くと〈変化〉の魔法がかかるようになっていて、というものだったんだ」

「〈変化〉ですか……」

ルーナは少しばかり気が抜けた様子でつぶやく。
 なにしる世にも恐ろしいことが起こったとばかりに、ロドリーゴが強張った表情で語ろうとしていたのだ。最悪の状況——『死』という結末を、ルーナは想像していた。

それが〈変化〉の魔法がかかるだけとなれば、力も抜けるというものだ。
 「そんなに大変なことじゃないと思っただろう？」

ルーナの様子から内心を察したのか、ロドリーゴはそう言っただけで苦笑した。

「え、あの……」

「ハハッ、隠さなくてもいいさ。実際〈変化〉の魔法がかけられただけなら、そうたいしたことはならないしな」

「じゃあ、どうして大丈夫じゃないってことになったんですか？」

ルーナは、好奇心を隠すことなく質問する。

「その〈変化〉なんだが、ある生物に強制的に変身するようになっていた。で、その生物というのが……ノミなんだ」

「え？ ノミ？ ノミってあの、猫とか犬とかについたりする？」

「そう、そのノミだ」

断言するロドリーゴに、ルーナは呆気に取られる。

（ノミ？ 確かに進んで変身したいようなものではないけど……）

首を傾げるルーナに、ロドリーゴがさらに説明を足した。

「考えてごらん。ノミに〈変化〉するんだ。まず、小さすぎて見過ごされてしまう。そして害虫と
 いうことで、見つければあっさりと駆除されてしまうわけだ」

「そ、それは……」

「ちなみに、あくまで〈変化〉しているだけだから話せることは話せる。だが、ノミ相応の音量と
 いえば……わかるね」

「なんて恐ろしい……」

顔を青くするルーナに、ロドリーゴもうんうんとうなずいてみせる。

「幸いにも、彼が本を開いて〈変化〉の魔法をかけられたことは、司書や同僚が見ていた。だから
 小さなノミになったことに気づいたし、魔法を解くこともできたんだ。だが、もし一人でそんな目
 に遭っていたとしたら……一生気づかれないか、ただのノミだと思われて駆除されてしまうかだっ
 ただろうね」

「絶対に、帯がしてある本には触りません！」

ルーナは、即座に宣言した。その素早さに、ロドリーゴは堪え切れず笑う。

「わかったわかった。そういうこともあって、あの部屋には一見普通に見えても実は危険な書物だ
 った、というものが多い。心に留め置いておくように」

「わかりました。肝に銘じておきます」

「よし、じゃあさっそく案内しようか」

「はい」

気を引き締めて返事をした後、ルーナは促されるまま、ロドリーゴの後についていった。そして、壁に取り付けてある扉付きの柵の前に立つ。

ロドリーゴが扉を開けると、中にはいくつもの赤い石が整然と並んで埋め込まれていた。(マンシヨンの呼び出しベルのボタンみたい)

そんなことを思っているルーナに、ロドリーゴはその中の一つの石を指差した。

「これが目的の部屋へ〈転移〉するためのスイッチだ。ここに魔力を込めて触れれば良い」

「わかりました。ちなみに、帰りはどうすればいいですか？」

「部屋のドアの横に、同じような石が埋め込まれている。それに触れてから〈転移〉すれば、この部屋に跳ぶはずだ」

「なるほど、了解です」

「では、さっそく行くかね」

「はい、よろしくお願ひします」

丁寧に礼をするルーナに、ロドリーゴは思い出したかのように、懐から小さな鈴を取り出した。

「すまない、これを忘れていたよ」

「これは？」

手渡された鈴を見つめたまま、ルーナは不思議そうに聞き返す。

「これは〈遠話〉の魔道具だ。何かあれば、これで連絡してくるといい」

「わかりました。何から何まですみません」

「いいんだよ。本当に遠慮なく連絡してくれていいから」

「はい」

ルーナはしっかりとわずくと石に触れ、〈転移〉の魔法語を唱えたのだった。

レングランド学院および研究所は、現在の王宮——白焔宮に機能が移る前、王宮として使用されていた建物だ。

広大な敷地の中、学院と研究所のちょうど中間あたりにある建物が、レングランド図書館である。ありとあらゆる分野の蔵書が集められた施設は、大陸でも最高峰と名高い。

そんな図書館の一角に、一般には公開されない、貴重な蔵書がおさめられている部屋がある。書架で埋め尽くされたその部屋の奥には、さらに別の場所へと続く扉があるのだ。

そこそが、研究員はおろか司書ですら通常は立ち入りが許されていない、特別な部屋。

置いてあるのは、遺跡から発見された世界でただ一つという書物や、ルーナの目的である禁書と呼ばれるものなどだ。

「ふう……無事に着いたみたいだね」

ルーナは周囲を見回して、そうつぶやく。

さほど広くはない部屋には、壁際に大きな書棚が一つだけ設置されている。他にはいくつかの箱やチェストが置かれていた。

その様子から、図書室というよりは倉庫と称するほうがしっくりくる。

(あ、でも……ここにある箱やチェストの中身が全部本なら、結構な量だよね)

ルーナはひとまず中身を確かめようと、あたりにあるチェストや箱を開けてみた。そして予想通りの結果に苦笑する。

そうして一通り調べたところ、無造作に置かれている本には、危険を示す帯が少ないと気づく。

しかし、棚の一角や、しっかりと鍵がかけられているガラス扉の本棚に保管されている書物には、帯封のものが多かった。さらには、帯ではなく頑丈な鎖が巻きつけられたものまである。

(帯より頑丈にしてあるってことは、触るだけでも危険なものなんじゃ……)

ゾクリと悪寒が走るのを感じつつ、ルーナは気を取り直して別の箱に近づく。

(ロドリーゴさんが、鍵や封印が施してあるものは無視していいって言ってたもんね。ってことは、この辺からかな……)

ルーナは箱の前に膝をつくと、箱の蓋を開いた。

中には十数冊の本。綺麗なものからぼろぼろになったもの、美しく装丁されたものから紐でくっただけのものまで、多岐に渡る書物が入っていた。

カサリと本のページをめくる音だけが周囲に響く。

ルーナはただひたすら箱を漁り、中に入っている本に目を通した。

表紙や、数ページ読んだだけで不必要だとわかるものは少ない。ある程度まで目を通さなければならぬため時間がかかる。

「これも違う」

ルーナはため息を零し、手に持っていた本を箱の中に戻した。そして新たにまだ確認していない本を手取る。

今度の本は、黒革を使った装丁のものだ。ただし、飾りの類いはなく、タイトルすら書かれていない。

「ちよつと不気味かも」

艶のない漆黒の表紙を開いたルーナは、そのままページをめくっていった。

数分後、文字を追っていた彼女の目が大きく開かれる。

「これ……!」

思わず声をあげたルーナは、その拍子に開いていたページを閉じてしまった。

「ああっ、もうっ! 何やってるのわたし!」

自分を責めつつ、彼女は先ほど開いていたページを慌ただしく探す。そしてようやく該当するページを見つけ出した。

ルーナは表情を改めると、真剣な眼差しで文字を追った。

魔力封じ。

それはもともと魔の力を持つ魔物、そして魔族に対しての手段であり、遺跡から発掘された魔法である。

現在でも魔力のすべてが解明されたわけではない。



だが、人が魔法を発動させる時に使用した魔力がどうやって回復していくのか——その答えはわかっていない。無意識のうちに、自然界にある魔力をわずかながら吸収しているのだ。

そう考えると、人の魔力量というのは魔力の器うつわの大きさとも言える。

取り込む量よりも多く魔力を使えば、回復が追いつかず枯渇かかつし、死に至るのだ。

魔力封じとは、魔力の流れ——体内を巡る魔力の流れを堰せき止めるもの。

その結果、魔法を使用することができなくなるのだが、それより恐ろしいのは、魔力をまったく放出できなくなることだ。

堰き止められた魔力は、放出されることなく器に留め続けられる。その一方で、魔力は自然と吸収されるため、魔力量は上がっていく。

やがて行き場のない魔力は急流のように、勢いづいて体内を巡ることになる。

魔力封じを施ほどこされた魔物は、体内で起こる魔力暴走によって、為す術すべもなく倒れる。どんなに強い魔物だとしても、それは変わらない。だからこそ、究極の策として編み出された魔法なのだ。

しかし、術の使用には大きな問題があった。これを発動させるためには、術者の生命いのちが引き換えとなる。

ゆえに、よほどのことがない限り、使用されることはなかった。

それからさらに時を経た後のこと。確実に相手を死に至らしめることができる方法として、暗殺に使用される事件が起きた。

それを機に、魔力封じは禁呪とされ、人々から忘れ去られることになったのだ。

ルーナはそこまで読んで、本から顔を上げた。

(魔力封じ——リユーにかけられた魔法は、これなんじゃないかな)

その症状から予想はついていたが、どんなものであるのかはつきりと知ることができないのはありがたい。小さな発見ではあるものの、何もないう状態から考えれば前進だった。

彼女は、他に記述はないかとページをめくったが、リュシオンの役に立ちそうなものはない。

さらに他の本にも目を通したが、残念ながら何も見つからなかった。

(あとは、王宮の図書室で新しい情報がみつければいいけど……)

ルーナは、祈りを込めて思うのだった。

その日の夜、ルーナは父アイヴァンの書齋にいた。

黒い革張りのソファに長兄ジーンと並んで座り、対面のソファにアイヴァンが一人座っている。

「ルーナ、何か成果はあったのか？」

口火を切ったアイヴァンに、ルーナは困ったように眉尻を下げた。

「そこまでの成果はなかったんだけど……リユーのかけられた魔法がどういったものなのかは、見当がついたよ。やっぱり禁呪の類いみたい」

「そうか……」

ルーナの答えに、アイヴァンは厳しい表情でつぶやく。そんな父の様子を窺いつつ、ジーンは

ルーナへと向き直った。

「ルーナ、わかったことを教えてくれるかい？」

「うん。リユーがかけられたのは、たぶん『魔力封じ』という禁呪だと思う。それは——」

彼女は、今日見つけた本に書かれてあったことを、二人に説明した。

持ち出しが禁じられている禁書だが、ルーナがいれば問題ではない。転生時の神からの贈り物として、必要に応じて見たままを思い出せるのだ。

もともとアイヴァンとジーンは、一言一句違わず本の内容を告げるルーナを見て、彼女が一生懸命諳んじていると思うのだが。

リュシオンも、ルーナの隠された能力については知らない。しかし偶然にも、こういった調査を彼女に依頼したのは、結果的には適材適所だったと言えた。

ルーナから経緯を説明されたアイヴァンは、厳しい表情を崩さないまま口を開く。

「もつと事細かに調べれば新たな情報も見つかるだろうが……いかなせん時間がない。再度調べるにせよ、ひとまず王宮の図書室の書物を確認してからだな」

「うん。もし、王宮でもめぼしい情報がなかったら、念のためもう一回学院の図書館を調べさせてもらおうつもり」

「それが建設的だね」

ルーナの言葉に、ジーンは同意してうなずく。そして、思いついたように彼女に尋ねた。

「ところで、王宮の図書室へはいつ行くつもりなんだい？」

「問題なければ、たぶん明後日になるんじゃないかな。その日が図書室のお休みだから、司書さん
もいなくてちょうどいいって」

「事が事だけに、司書に頼むこともできないからな」

「そうなの。それで父様と兄様にお願いがあるんだけど……」

「なんだ？」

「手伝えることなら、もちろん」

ルーナの問いかけに、アイヴァンとジーンは躊躇いなく答える。それを心強く思いつつ、彼女は
口を開いた。

「王宮に赴くのには何か理由が欲しいの。二人のうちどちらかに同行させてもらえればなって。あと、
何かあった時はどちらかの名前を出させてもらうとありがたいんだけど……」

「なるほど。そうだな……ならばちょうど先日、学院の改革案について、生徒の意見を聞いたらど
うかという提案があった。まずは手始めに、学院に通っている娘を連れてきたというのはどうだ？」

アイヴァンが提案すると、ルーナより先にジーンが賛成する。

「いいですね。生徒の意見を聞くにあたって誰を選ぶかについても、ルーナの意見を参考に、とい
うのは理にかなっていますし、不審に思う者もいないでしょう」

「ああ。それに資料を見せるという理由ならば、図書室にいても誰に見咎められることもないは
ずだ」

「加えてその件の担当者はホレスですし、口裏を合わせておけば問題ないはず。もつとも、後で本
当にルーナの意見を聞くことになるでしょうけど、それは何も王宮じゃなくても良い。後々、ここ
に彼を招けば済む話です。それで良いかい、ルーナ？」

ジーンに確認され、ルーナはコクコクとうなずいた。

彼の説明に出てきたホレスとは、王妃の毒殺事件が起きた時、あやうくその犯人にされてしま
うところだった青年だ。

グレイヴル伯爵家の嫡男で、ジーンと共にリュシオンの側近を務める者でもある。

彼もリュシオンの件について知っているため、協力してくれるはずだ。

ルーナとしても、王宮で誰にも会わずに任務を完了するつもりではある。しかし、多くの人が行
きかう場所ゆえ、何が起ころるかもわからない。

不測の事態に備え、理由を考えておくのは大事なことだった。

「それじゃあ、明後日までに根回しをしておいてもらっていいかな？」

「ああ、まかせなさい」

「私の方も、ホレスに伝えておくよ」

「ありがとう、父様、兄様！」

二人に礼を言うと、ルーナはほっと安堵の笑みを浮かべた。

それから、二日が経ったある日。

ルーナは、打ち合わせ通り父であるリヒトルーチェ公爵と共に、王宮を訪れていた。

王宮の中でも、各部署の執務室や会議室がある本宮。そこに足を踏み入れたルーナとアイヴァンは、何食わぬ顔で図書室へと向かう。

図書室と称しているが、実際は本宮の端に位置した棟を丸々使っているため規模が大きく、図書館と言えるほどだ。

それでも、レングランド学院の図書館と比べれば小さい。

さらに、王宮の図書室というだけあり、その蔵書の多くが政治や経済といった、まっしと政に必要な分野のものが多かった。

本宮の端にあるためか、図書室へ近づくにつれ人気がなくなってくる。最後に人とすれ違つてからは、すでに数分もの時間が経っていた。

それからほどなくして、ルーナとアイヴァンは一つの扉の前に辿り着いた。

白く塗られた木製の扉は、両開きの大きなものだ。

扉の前に立ったアイヴァンは、胸ポケットから鍵を取り出すと、鍵穴にそれを差し込んで回す。

かちやりと音を立てて開錠すると、アイヴァンは扉を開けてルーナを先に通した。

「わあ……」

中に入ったルーナは、目の前の光景に思わず声を漏らす。

そこには、舞踏会が開けそうなほど広い空間があった。中央部分は遮るものがなく、天井まで吹き抜けになっている。

階段は端にあり、それを上ると壁に沿って廊下が続いている。その端にある階段をさらに上れば、

上階も同じ構造になっていた。

壁面はすべて本棚で、各階の壁面も同様に本棚で埋め尽くされている。

(そういえば、ノリリーナさんの図書館といい学院の図書室といい、最近いろんな図書館巡りをしている気がする)

ルーナはふと気づき、心の中でクスリと笑う。

ノリリーナとは、大陸の北端——雪と氷に覆われた地に隠れ住む『とこしえの賢者』と呼ばれる人物だ。人物とはいふものの、その姿は大きな鶏トリ。しかもピンク色をした鶏なのだが。

その彼女が住む氷の城にも、膨大な蔵書を誇る図書館があったのだ。

(こっちでいくつか図書館を見たけど、前世の図書館より好きかも)

ルーナは前世の記憶を思い起こしながら、そんな感想を持つ。

多くの蔵書が収められている点では、日本もサンクトロイメも同じだが、さまざまな色合いの革装丁の本が整然と並ぶ様は、なんとも言えない『美しさ』があったのだ。

(父様やリユーの話だと、普段から利用する人は少ないみたいだけど、もったいないよね)

ルーナがぼんやりと周囲に目をやっていると、後ろから声がかかる。

「ルーナ、私はここで待っているよ。今のうちに行っておいで」

アイヴァンに促され、ルーナはハッと我に返った。そしてここに来た目的を思い出すと、改めて気を引き締める。

「じゃあ行ってくるから、父様、よろしくね」

「ああ、任せておきなさい」

うなづく父を見た後、ルーナは奥へと歩き出した。

今日は誰も図書室を使わないはずだが、万が一がないとも限らない。そんな時のため、アイヴァンが入り口で待機してくれているのだ。

レングランドの図書館と同じように、禁書の類たぐいは奥にある別室に仕舞われている。

広い部屋の中央まで進むと、進行方向を右へ。本棚に囲まれた狭い通路をさらに進めば、突き当たりに白い扉があった。目的の部屋だ。

ルーナは、リュシオンから預かった鍵をポケットから出すと、目の前の鍵穴へと押し込んだ。

カチャリ。

開錠された音が部屋の中で小さく響く。

「おじやます……」

誰もいないにもかかわらず、そう挨拶をしながら、ルーナは奥の部屋へと足を踏み入れた。

「これは……博物館の展示スペースっぽい？」

室内に入り、ルーナは意外そうにつぶやく。

レングランドの図書館と同じく、倉庫のような内装をイメージしていた彼女は、目の前の光景をそんなふうに表示する。

壁に沿って大きな書棚が二つ並んでおり、そこにも整然と本が並んでいる。

他には、横長の机が並んで配置され、その上にはさまざまな年代を思わせる書物がいくつも置か

れていた。

(うーん、とりあえずレングランドの図書館よりずっと数が少ないのは助かるかな。とにかく、片端から見に行こう)

ルーナは気合を入れるため、ぐっと両の拳こぶしを握りしめる。

そうして一時間ほどが過ぎた。

二つの書棚のうち、片方に仕舞われている本をすべて確認し終えた彼女は、小休憩を取ろうと立ち上がり伸びをした。

一冊をまるまる読んでいるわけではないが、かなり集中して確認作業を行うため、疲労が溜まるのだ。

(頑張らなきゃ)

リュシオンの生命いのちがかかっているのだ。

ルーナは、疲労感を振り払うように、もう一つの書棚に向き合う。

赤、青、茶、黒。

さまざまな色の装丁の本に、彼女はただひたすら目を通していった。

集中しているせいで気づいていなかったが、ルーナがこの部屋に来てすでに二時間が経過している。

その時、彼女は手にしていた本のある記述に目を留めた。

「これって……！」

ルーナが手に取ったのは、とある男の回顧録だった。そんなものが何故禁書扱いなのか疑問ではあるものの、今はそのことが問題なのではない。ルーナは逸る気持ちを抑え、ページの最初から改めて読み始めた。

ヴィントス皇国とエアデルトの二国と国境を有する、小国リカール。

そこを訪れた私は、忌まわしい男の話聞いた。

禁呪使い。

禁じられた魔法を使うのを生業とする、恐ろしくも忌まわしい者だ。

それらの者たちが蔑まれるのは、ただ禁忌の魔法を使うからだけではない。

使用者の生命を糧にするという魔法の呪いを、自分ではなく他者に肩代わりさせるからだ。

そう、彼らは他人の生命を贅に、恐ろしい魔法を展開していた――

「リカール……」

国名をつぶやき、ルーナは自分の知識を呼び起こす。

リカールは、クレセニアの南にあるサイオンデル湖から、さらに南方に下ったところにある小国だ。

小さな国土のほとんどが山であり、人口も少ない。クレセニアのような大国から見れば、貴族の領地の方が広いくらいだった。

（この記述が正しいかどうかはわからないけど、禁呪使いについて記されているのはこの部分だけみたい。単なる与太話なのか、それとも本当のことか……確かめてみる価値はあるかもしれない）
ルーナは本に出てきた国名をしつかりと記憶すると、さらなる情報を求めて次の本へと手を伸ばす。

それから一時間後。

部屋にあるすべての本を確認したルーナだったが、目ぼしい情報は先ほどの回顧録のものしかなかった。

（とりあえず、このリカールの禁呪使いについて調べよう。詳しい場所は書かれていないけれど、ある程度の範囲さえ絞れば――そうだ！）

名案を思いついたルーナは、表情を引き締めると、長らくいた部屋を後にしたのだった。

十

「それで、何かわかったんですか？」

過去へと意識を飛ばしていたルーナは、カインの言葉に我に返る。

「ええと、リユーのことだよ。……進展というか、少しだけわかったことはあったよ。後でリユーと一緒に説明するね」

「確かに、その方がいいですね」

「うん。リユーも、もうそろそろ来るだろうし」
「はい」

カインがそう返事をする、まるで見計らったかのように部屋のドアが開く。
王太子であるリュシオンの部屋。そのドアをノックもなしに開ける人物といえは一人しかない
い——リュシオンだ。

「悪い、待たせたな」

リュシオンは、軽く手を上げて言うと、ルーナたちと同じテーブルについた。

気安い態度はいつもと変わらないリュシオンだが、ルーナとカイン二人の前だからだろうか、顔
には疲労の色が浮かんでいる。

（リユー、すごく疲れてみたい）

疲れている原因が本日行われた王妃の国葬だと考えれば、単純に「お疲れ様」などという^い労りの
言葉をかけて良いものか、ルーナは迷う。

いろいろ考えた結果、彼女は心配そうな眼差しをリュシオンに送るだけに留めた。

「さっそくだがルーナ、何かわかったことはあるか？」

深く息を吐いた後、リュシオンが口火を切った。

「うん。まず、リユーにかけられた魔法のことなんだけど……」

「ああ」

「レングランドの図書館の方で調べたところ、やっぱり魔力を封じるもので間違いないと思う。も

ともとは、対魔物や対魔族を想定したものらしいんだけど」

「魔物や魔族相手となると、随分昔の魔法ということになりますね」

ルーナの言葉に、カインが口を挟む。

魔物は今も存在しているが、魔族は一般的に滅びたと言われている。

魔力封じが魔族対策に使われていたとするならば、滅びるより前——つまり、数百年前に使われ
ていたということだ。

ただ、魔族の存在を^ま目の当たりにしている三人にとっては、滅びたという事実が人類の希望的観
測にすぎないことを知っていた。

「その魔法自体は、魔族の脅威が去ったことで^{すた}廃れていったんだけど、今度はそれを悪用——つま
り暗殺術として利用する人間が出たの。だから禁呪とし、封印されたみたい」

ルーナの説明に、リュシオンとカインは深くうなずいてみせる。

「症状は、リユーが思っていた通りだったよ。魔力が体内で飽和状態になって、それが……」

「暴走して、自分を殺す」

言い淀む^よルーナに代わり、その先を口にしたのはリュシオンだった。

「——ッ！」

「リュシオン」

直接的な言葉に息を呑んだルーナを見て、カインが^よ咎めるように声をかける。

「悪い。だが事実だ」

リュシオンは淡々と答えると、青褪めるルーナへ視線を向けた。

「他にわかったことはあるか？」

ルーナは自分を落ち着かせるように深呼吸をすると、改めて口を開く。

「……レングランドの図書館にあった本では、それくらいしかわからなかったの。後は王宮の図書室で、気になる記述を見かけたくらい」

「気になる記述ですか？」

「そう。ある人の回顧録の中の記述なんだけどね。リカール王国で禁呪を使う男がいたって話があったんだ」

「禁呪を使う者か……」

その言葉を聞いたリュシオンは、顎に手を置いて考え込む。

そんな彼の隣で、カインが確認しがてらつぶやいた。

「リカールというと、エアデルトとヴェイントスの間に挟まれている、小さな国でしたよね」

「うん。しかも国土の大半が山って言う」

「本来であれば存続するのも難しいほどの小国ですが、緩衝地としての役割があるため、双方の国もなくなってもらっては困ると考えているようです。それゆえに二国間から援助を受けている国ですね」

カインの説明に、ルーナはなるほどと納得する。

「それでね、リカールにそんな人物が本当に存在するのか、風姫さんに頼んで探ってもらって

たの

「なるほど。精霊ならば距離は関係ありませんし、適任ですね」

「うん。それで風姫さんいわく、リカールの山地方面に、何か嫌な感じがする場所があるっていうの。ただ、精霊はそれ以上近づけなくて、誰がいるのかまではわからなかったみたい」

「そうですね。ですが、精霊を寄せ付けない場所ならば、十分怪しいと言えますね」

「そうなんだよね」

ルーナとカインがうなずき合っていると、考え込んでいたリュシオンが口を開いた。

「リカールの禁呪使い……それが本当に存在するのか、存在したとしても現在もその場にいるのか。行って確かめてみるしかないな」

「わたしもそう思う」

ルーナはリュシオンの言葉を肯定する。

もちろんそれは、自分が行くという意味でもあった。

「僕もお伴しますよ。エアデルトを通ることになれば、僕の身分が役に立つことになると思いますし」

カインが当たり前のように言って、他の二人に笑いかける。

「カインが一緒なら心強いよね。だからリュー、わたしたちに任せて！」

ルーナはカインと顔を見合わせてリュシオンに訴えた。

そんな二人に、リュシオンは無言のまま表情を硬くする。

当事者はリュシオンだ。

本来ならば、自分でなんとかしたいというのが本音だろう。

しかし、彼は大国クレセニアの王太子なのだ。

たとえ自分のことであろうとも、そうそう勝手が許されるものではない。

カインも同じような立場だが、留学中の第二王子ということで、ある程度の自由がきく。ゆえに、ルーナに同行するのはさほど難しいことではなかった。

「リュー、大丈夫だよ。わたしたちを信じて」

テーブルに置かれたリュシオンの手に自分の手を重ね、ルーナは宥めるように口にした。

「リュシオン、ルーナの言う通りです」

「ああ、わかっている」

カインの言葉に、リュシオンは大きなため息と共に答える。

しかし次の瞬間、彼は二人に向けて宣言した。

「だがな、今回ばかりは俺も行く」

「リュー！」

「リュシオン！」

ルーナとカイン、二人が信じられないとばかりに声をあげた。

驚く二人に対し、リュシオンは強い決意を込めた眼差しを向ける。

「いいか？ これは俺自身のことだ。それをおまえたち任せにして、自分は何もしないなんてあり

えない」

「リューはこの国の王太子なんだよ？」

「そうです。貴方の身に何かあったらどうするんです？」

二人の言葉に、リュシオンはフツと笑ってみせる。

「何かあったら？ もうあったさ。そしてこの禁呪が解けなければ、どっちにしても俺の生命は終わる。なら、俺は自分のために戦って足掻く。それであれば、たとえ死ぬようなことになったとしても後悔はない」

きっぱりと言い切ったリュシオンに、二人は息を呑んだ。

「リュー……」

「ルーナ、カイン。そうは言ったが、死ぬ気なんてさらさらないさ。自分の手できつちりと解呪してやる」

自棄になるでもなく、ただ確信しているようなリュシオンを見て、カインは苦笑する。

「わかりました。でも、国王陛下やリヒトルルーチェ公爵への説得は自分でして下さいね。決して僕たちに協力を求めないようお願いします」

カインの宣言に、リュシオンは表情を一変させる。

「は？ 助けるよカイン」

「それくらいの覚悟はして当然でしょう？」

「それとこれとは別だろ」

「違いませんよ」

「おいっ！」

「公爵と国王陛下は手強いですが……せいぜい、頑張って下さいね」

「嘘だろ、おい……」

二人の言い合いに、ルーナは最初目を丸くし、次いで笑いが込み上げてきた。

(大丈夫。リユーは死なない。絶対に！)

ルーナの胸に広がる確信に、先ほどまであった不安がかき消される。そんな彼女の様子に気づいたのか、いつの間にかリユシオンとカインの言い合いは終わっていた。

「——おまえたちの力を借りていいか？」

改めてリユシオンが尋ねると、ルーナとカインは力強くうなづく。

「もちろんだよ」

「ええ」

「今回は禁呪使いが相手だ。当然戦う可能性も強い。かなりの危険が伴うんだぞ」
翻意を促すように言い、リユシオンはルーナとカインに険しい視線を向けた。

だが二人は、その眼差しをしつかりと受け止める。

「覚悟の上だよ。それに一人なら心配かもしれないけど、三人なら大丈夫」

にこやかに言い放つルーナに、リユシオンもカインも眩しげに目を細めた。

「そうですね、三人なら」

「……ああ。おまえたちが一緒なら、きっと望む結果が得られるはずだ」

暗い雰囲気が一掃され、三人は明るい表情でうなづく合う。

だが、その時だった——

「リユー——」

「リユシオン——」

椅子から立ち上がったリユシオンの身体が、ゆっくりと傾く。

そのまま崩れるようにして、彼は床に膝をついた。

「リユー、どうしたの!？」

慌ててルーナがリユシオンに駆け寄る。

それに応える余裕もないのか、リユシオンは俯いたまま歯を食いしばっている。

「リユシオン、まさか……」

カインのつぶやきを拾った瞬間、ルーナはハツとしてリユシオンの袖を強引に捲り上げる。
そこにあつたのは、先日よりも濃く、そして範囲を広げた不気味な痣だった。

「リユー、これって……!？」

ルーナがリユシオンの襟元を広げれば、肩口まで侵食する赤黒い痣が見えた。

「リユシオン、体調に変化がないというのは嘘ですね？」

カインが鋭く尋ねると、リユシオンは苦しげな表情のまま無理に笑みを作る。

「大丈夫だ。すぐに治まる」

「リユー！」

どう見ても大丈夫そうには見えないリュシオンに向かって、ルーナは咎めるように叫んだ。しかし彼は、力強い眼差しを緩めることなく言う。

「すぐに治まる。だから心配するな。今さら俺を置いていくとかは、なしだぞ」
「リュシオン……」

強がりというだけでは片づけられない気迫に、カインはため息をつくしかない。それでも、ここまで揺るがないリュシオンの意地を、彼は尊重しようと考えてる。

「……わかりました。で、対処法はあるんですか？」

「時間だな。しばらくすると症状が消える。現にもう落ち着いた」

その言葉通り、リュシオンの態度に苦しげなものはない。

それでも納得できないルーナは、意を決して口を開いた。

「リユー、そんな体調で旅なんて無謀だよ。お願い、今回は……」

「すまないが、それは聞けない」

ルーナの言葉を遮り、リュシオンはきっぱりと告げた。

「ルーナ、仕方ありません。リュシオンがここまで言っているんです、本人の意思を尊重しましょう。症状が出たら、僕たちでフォローしていくしかないです」

「そういうことだ」

カインの言葉に、リュシオンはすかさず同意する。

男同士でわかり合ったようなやり取りを見て、止めても仕方ないと思っただろう、ルーナはふうつと息を吐いた。

「……わかった。でも無理はしないでね。苦しい時はちゃんと行って。でないと一緒には行かないからね」

「ああ、わかった」

素直にうなずいたリュシオンに、ルーナはそれ以上何も言えず、ただこれ見よがしに大きなため息をついたのだった。